

ラカンにおけるマルクスの遺産

番 場 寛

はじめに

ラカン理論の特徴の一つに「欲望」のメカニズムの解明がある。「対象 a」と呼ばれる「欲望の原因対象」に突き動かされる人間のあり方をラカンは「人間の欲望は<他者>の欲望である」という定型表現にまとめ、自己のセミナーで繰り返した。そしてその欲望との関係のあり方で神経症や精神病を説明しようと試みている。人間の欲望を「家族」や「知人」という領域から、社会のあり方へと視点を広げると、欲望が、資本主義にもとづく現代の消費社会の根底をなしているということは、疑い得ないであろう。しかし、個人の精神分析的臨床に基づくラカン理論はそうした資本主義の消費社会を説明するには遠すぎると思われるかもしれない。消費社会のメカニズムは、マルクス経済学によってこそ解き明かされるのではないかと思われるのも無理はない。

ラカンはセミナー第 17 卷『精神分析の裏側』¹⁾で、独自の四つのディスクール（語らい）discours の概念を提示した。それによりラカン理論は一挙に社会を解読する視点を示すことになった。さらに、このセミナーですでに名前は出していたものの、実際に他の四つのディスクールと同様に図式で五つ目のディスクールである「資本家のディスクール」を提示したのは 1972 年 5 月 12 日のミラノで行なわれた講演においてである。

本稿では、ディスクールという概念を巡って随所に見られるマルクス概念がラカンにおいてどのように影響を与えているのか、言い換えればラカンがマルクスをどのように読み自分の理論を構築して行ったのかを探る。

1 ディスクールという概念

前掲のミラノの講演では、ラカン自身が自己のディスクールの概念を以下のように。分かりやすく定義している。

ディスクール、それは何でしょうか？それは、秩序において、言語活動の存在によって生み出されるものの構成において、社会紐帯 *lien social* の役割をするもので²⁾す。

これに続けてラカンは、こうした見方は社会学者の賛同を得られる見方だろうが、自分の考えは違うという点としてディスクールが四つしかないこと、そしてそれを構成するシニフィアンは、まず二つあり、「シニフィアンとは主体を別のもう一つのシニフィアンに対し代理表象するものだ (*le signifiant, c'est ce qui représente un sujet pour un autre signifiant*)」という定義にみるように「シニフィアンの効果」として主体を捉えていることを明言する。ラカンはこれに続けて、さらに新しい概念である「剰余享楽 *le plus-de-jouir*」についても説明している。

私たちは言語活動が何を生み出すか知っています。それは何を生み出すのでしょうか？ 私が剰余享楽と呼んだものをです。なぜなら、それは私たちがよく知っていますが、この次元で適用される用語、欲望と呼ばれる用語です。より正確に言えば、それは欲望の原因を生み出すのです。そして対象 *a* と呼ばれるのはそれなのです。³⁾

2 ラカンにおけるマルクスの引用

本稿で検討するラカンのセミナーにおいて、マルクスの名が引用されるのは、彼の「剰余享楽 (le plus-de-jouir) という概念がマルクスの「剰余価値 (la plus-value)」という概念から来ていることをラカン自らが明言するときである。

例えば、1971年2月10日のセミナーでは、マルクスのこの「剰余価値」という概念は正確に言えば、マルクスによって新しく発明されたというより、「掘り出し物 *trouvaille*」として発見されたと見なすべきであるということ、そしてその「剰余享楽」という概念は「剰余価値」という概念と同様に「資本家のディスクール (語らい)」というディスクールにおいてのみ発見できると明言する。さらにラカンはこの「資本家のディスクール」は「主人のディスクール (語らい) (le discours du maître)」と最も深い関係があると言う⁵⁾。

ではラカンがセミナー第17巻で提示した四つのディスクールの基本ともなるこの「主人のディスクール」とはどのようなものであろうか。すでに別の箇所⁶⁾で論じたが、ラカンの提示するディスクールは四つの固定された場とその場を同じ順序で並べられたまま、回転する形でその四つの場を移動していく四つの項からなる図で説明されている。その四つの項は、それぞれ S_1 (主体)、 S_1 (主人としてのシニフィアン (signifiant-maître)), S_2 (知 *savoir*), a (対象 *a objet petit a*, 剰余享楽 *le plus-de-jouir*) である。

以下に示すように戸惑わせるのは、四つの場所は固定されているものの、「真理」を除いて同じセミナー第17巻でも、また別の年においてもその呼び名を変えていることである。

1

<u>欲望 (désir)</u>	→	<u>他者 (Autre)</u>	(S17, p106)
真理 (vérité)		喪失 (perte)	

2

<u>動因 (agent)</u>	→	<u>労働 (travail)</u>	(S17, p.196)
真理 (vérité)		産出物 (production)	

3

$$\frac{\text{動因 (l'agent)}}{\text{真理 (la vérité)}} \rightarrow \frac{\text{他者 (l'autre)}}{\text{産出物 (la production)}} \quad (\text{Radiophonie in Autres} \\ \text{écrits, p. 447})$$

「動因」の位置が、「欲望」の位置でもあるというのは、それが動きの基点になるからと理解することが可能だし、「他者」という場はその「動因」という場から始まった動きが影響を及ぼす場と考えれば「他者」という場は同時に「労働」の場でもあり、それが「産出物」を生むと考えられる。「喪失」は「産出物」とは、正反対の概念のように思われるかもしれないが、「労働」の結果として起こることと考えれば、納得いくのではないだろうか。

こうした四つの場に四つの項を当てはめたのが具体的なディスクールの図であるが、以下に示すのが「主人のディスクール」である。

$$\frac{\text{主人としてのシニフィアン (signifiant-maître)}}{\text{主体 (sujet)}} \rightarrow \frac{\text{知 (savoir)}}{\text{享楽 (jouissance)}} \quad (\text{S17, p. 105})$$

これにそれぞれの機能を表す記号を入れたのが、 $\frac{S_1}{\mathcal{S}} \rightarrow \frac{S_2}{a}$ である。そしてそれぞれの機能を表す四つの記号 (\mathcal{S} , S_1 , S_2 , a) をそのままの順序で90度ずつ回転するように場を移動させていくと次のように他の三つのディスクールができる。

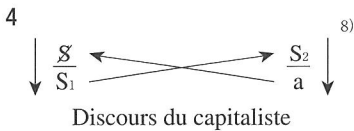
ヒステリー者のディスクール	分析家のディスクール	大学のディスクール
$\frac{\mathcal{S}}{a} \rightarrow \frac{S_1}{S_2}$	$\frac{a}{S_2} \rightarrow \frac{\mathcal{S}}{S_1}$	$\frac{S_2}{S_1} \rightarrow \frac{a}{\mathcal{S}}$

この四つの場に置かれた記号の関係がそれぞれどのような意味を持つのかという点についてはラカン自らは明確には説明していない。これを考えるのになぜ考えるべきなのは、随所でラカンが提示しているシニフィアンの定義、「あるシニフィアンは主体をもう一つの別のシニフィアンに対し代理表象する (Un signifiant représente le sujet pour un autre signifiant)」である。

これを「主人のディスクール」に当てはめて考えると、あるシニフィアン

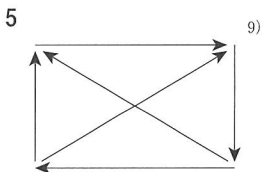
S_1 はもう一つの別のシニフィアン S_2 に対し主体 $\$$ を代理表象していることになる。そして a という剰余享樂を産出物という場に生み出すことになる。

しかし分からないのはこれが基本になり他の三つのディスクールが作られるということ、さらには 1972 年のミラノの講演で初めて 5 番目のディスクール「資本家のディスクール」が図式で示されたが、それは以下に示すように S_1 と $\$$ を置き換えたようになっていることである。



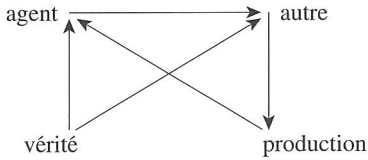
さらにこのミラノの講演でも、「ラジオフォニー」で示されたのと同様に、他の四つのディスクールに、上の段の項の左から右へ、そして左の下から上へと、右の上から下へとそしてそれぞれ下の段からは、たすき掛けに斜めの矢印が描かれている。それらの四つのディスクールと違って「資本家のディスクール」では矢印はたすき掛けの斜めのものと同側の上から下へと向いた計四つになっている。これは丁度一筆描きのように項が一定の方向に作用して循環していることを示している。

それぞれの意味を検討する前に、なぜこのような図の構成になるのかが問題となるが、これについてはマルク・ダルモン Marc Darmon が明確に説明しているので、彼の説明を辿ろう。まず彼によればラカンは 1972 年 2 月 3 日のサン・タンヌ病院での講演で四面体のグラフを示し、それを元に四つのディスクールを作ったのだ。それをそのまま示せば以下のようなになる。

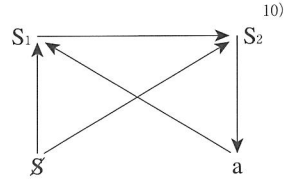


このグラフの特徴は、循環があるということと、それぞれの頂点が入ってくる矢印と出て行く矢印があるということである。ラカンはこのグラフから下の矢印を消し去り、以下のような図を示す。

6



7



すると左下の場、「真理 vérité」の所には矢印が入ってこないこと、それでいて他の箇所は循環を形成していることが分かる。そのグラフにそれぞれの四つの文字を配置したのが7の図（グラフ）であり、これがトポロジー的にとらえた「主人のディスクール」である。これを見るとSとaとの間に矢印がなく、これが「主人が剰余享樂を得ることの不可能性」を示しているとダルモンは説明する。¹¹⁾彼によれば、「資本家のディスクール」では、「歴史のある瞬間においては、生産は剰余享樂ではなく、剰余価値と呼ばれ、この剰余価値は資本と結びつき、上で喚起された無能さはかくして凌駕される¹²⁾」のであり、そのため下の矢印は描かれるのである。そしてこのグラフの斜めの矢印を消し、右側を固定したまま左側を上下逆になるようにひねると図4のように「資本家のディスクール」ができるのである。これは矢印が横に8の字を描くように配置され循環していることを示す。

では、この「資本家のディスクール」を検討する前に、その元となっている「主人のディスクール」の「主人としてのシニフィアン」とは何かであるかを検討しよう。ラカン自身はフロイトにおけるその例として「ある父の名」や「無意識、誘惑、心的外傷、幻想、自我、エス、そしてあなたが望むすべて」¹³⁾を挙げている。マーク・ブラチャー Mark Bracher は宗教的なディスクールにおいては「神」や「悪魔」や「罪」や「天国」「地獄」を挙げ、政治的なディ

スクールにおいては、「アメリカ人」や「自由」や「民主主義」や「共産主義」といった言葉が「主人としてのシニフィアン」の例として挙げられると説明している。¹⁴⁾つまり「主人としてのシニフィアン」とは、意識的、無意識的にある集団に流布しているディスクールを強力に支配しているシニフィアンと理解できる。

ところでこれを含めた四つのディスクールで問題となるのは、左から右へとつけられた矢印である。1970年に活字で発表された「ラジオフォニー」に収められている図式では上の矢印には「不可能性 impossibilité」と説明がつけられ、さらに下の段には右の項から左の項に向かって曲線の矢印がついており、それには「不能 impuissance」と書き添えられている。そのため文字が同じ順序で並べられたまま、回転してその位置を変えていく四つのディスクールにおいては、例えば「主人のディスクール」の S_1 の S_2 に対する不可能性がそれを全く裏返した配置になっている「分析家のディスクール」においては S_1 の S_2 に対する「不能」を表すことになる。セミナー17巻におさめられた図ではこの「不能」という記述はないが、下の段の二つの項が断絶していることを示す記号が置かれている。

この矢印をダルモンに倣い、「～に対し pour」と解釈すると、この矢印で示しているながらそれが不可能であるとは、いったいどういうことなのであろうか？

この点に関して、ダニー・ノーバス Dany Nobus は、この「ラジオフォニー」でラカンが、「主人のディスクール」においては S_1 の S_2 （知）の要求が不可能であることを暴露していると指摘している。それに元づき「それぞれのあるいは全ての個人の社会的に認知された支配者であろうと、精神的な支配者であろうと、主人 S_1 がいかに熱心に知 S_2 を支配し制御しようと試みても、知は常に部分的に逃れようとする。この制御の欠如の理由は定式の下段の二つの項の関係を特徴づけている不能のうちに見いだされなければならない」と説明する。¹⁵⁾

これを検討するために四つのディスクールが初めて提示された『精神分析の裏側』というセミナーに戻るとラカン自身がそれに関して触れている箇所がある。この年のセミナーにおいては、上の矢印にも下の二つの項についても「不可能性」という語も「不能」という語も添えられていないが、口頭で説明している。

一列目（訳者注：上の二つの項）は矢印で示されている関係で、常に不可能 impossible として定義される関係を含んでいます。例えば、「主人のディスクール」では、自分の周囲の人々 son monde を動かす主人がいることは、なるほど不可能です。人々を働かせることは、自分自身で働くより、ずっと疲れること¹⁶⁾です。

下の段の二つの項の間には矢印がないことについて、それは単に二つの項の間に伝達 communication が無いというだけでなく、「ふさぐ何か quelque chose qui obture」があると説明し、その何かとは「労働」により起こるものであり、それにマルクスが重い意味合いを込めて用いた「産出物」であるとラカンは指摘する。

動因 agent の位置に書き込まれにやってくる諸々の記号、主人としてのシニフィアンが何であれ、産出物はあらゆる場合において、真理とはいかなる関係もないので¹⁷⁾す。

現実におびただしく産み出される「商品」や「情報」は「真理」とはいかなる関係もないということである。

そして更にラカンはこの「不可能性」は「不能」によって保護されていると説明する、ある能力がないということで、できないということが認められるということなのであろうか。¹⁸⁾

3 R.-P.・ヴァンシグラ Rose-Paule Vinciguerra の ラカンを通してみたマルクス理解

ヴァンシグラは pas sans（なしにではなく）と passant（を經由した）という言葉遊びの意味を込めて「ラカンなしではない（を經由した）マルクス」という論文を発表している。¹⁹⁾これはコジェーブの『ヘーゲル読解』をラカンがどのように読み取ったかから説明している。彼女の説明を要約すれば、次のようになる。

「自意識」について、「自意識の同一性は実体的ではない」ので、自意識は自分についての客観的な確実性を自分だけで獲得することはできず、他の意識を必要とする。この自分自身への確信を得るために他者の欲望を通らなければならない。めいめいがお互いに他者の欲望を欲望し、他者に対して自分の欲望を認めさせるために争うことになる。

「主人は享樂する」というヘーゲルに対し、ラカンは疑問を投げかける。主人が奴隷との承認の闘いにおいて勝ったなら奴隷は主人のために働いてある剰余をもたらす。しかし主人は奴隷の享樂については知らない。「奴隷のうちに、そして奴隷が生産するもののうちに、奴隷がそれによって完全なものになるが、それについては何も知らないこの剰余(en plus)のうちに、主人は自分の剰余享樂を見つける」とヴァンシグラは要約する。²⁰⁾

「資本家のディスクール」において $\$$ と a との間の不可能を表す矢印については、ヴァンシグラは主人 (S_1) は自分が望んでいるものが何か分からず、奴隷の知 (S_2) に身をゆだねることを示していると解釈し、「不能 impuissance」と図の他の説明の箇所²¹⁾で記されている下の段については、主人は「享樂にではなく、主体の分裂($\$$)とは関係ないままの『剰余享樂(le plus-de-jour)』に接近する」と説明する。

ヴァンシグラはさらに、資本主義の生産の過程においてどのように「剰余価値」が生まれるかというマルクスの説を以下のように要約している。²²⁾

資本主義社会における生産物は「社会的有効性」としての「使用価値」で評価されるのではなく、商品としての「交換価値」で評価される。その「交換価値」を量化できるものにする「抽象的労働力」のみが「交換価値」を生み出す。資本主義社会ではこの「商品」となる「労働力」が「交換価値」を持つのである。ところがこの「労働力」は「自分自身の価値の彼方に価値を創造することが可能な驚異の商品」なのである。しかし、マルクスによれば、商品が売られた期間は、その再生産に必要な時間を多く越えるのである。この労働の追加は、価値の追加、マルクスが剰余価値と呼んだ超-生産物の創造者であり、剰余価値とは利益ではなく、それはプロレタリアからの交換価値の直接的な強奪とも言えるものである。つまり賃金としては支払われていないものとして剰余価値は深く隠されている。そしてこの剰余価値の獲得が資本と労働力を永続させる再生産という過程で資本主義を存続させるのである。

こうしたヴァンシグラの説明は以下に引用するラカンの「剰余享楽」の概念の起源であるとされる「剰余価値」についてのラカン自身の説明でより明確になる。

私たちは市場にいるがゆえに、労働にお金で支払います。私たちは市場で、交換価値の機能がそれを決めたように、その真の値段を支払います。しかしながら、労働の成果として現れるものの中には、支払われない価値もあります。なぜならこの成果の真の価値はその使用価値にあるからです。この支払われない労働は、資本主義の主体の働き具合においては市場の一貫性との関係で正當なやり方で支払われているのですが、それが剰余価値なのです。

それゆえ、剰余価値は資本家のディスクールを構成する分節の方法の成果なのです。それは資本家の論理から起こるもの²³⁾なのです。

このラカンのマルクス理解がどの程度正しいのか、筆者は分からないが、『資本論』の第三部、第一篇、第一章に見る限りでは、以下に見るような記述から、以上のラカンの理解は正しいように思われる。

商品価値のうち剰余価値から成り立っている部分が資本家にとってなんの費用もかからないのは、それが労働者に不払労働を費やさせるからにほかならない。²⁴⁾

(…) すなわち 商品価値 = 費用価格 + 剰余価値 に転化するのである。²⁵⁾

主にラカンの『精神分析の裏側』のセミナーに依拠した、ヴァンシグラの「資本家のディスクール」²⁶⁾の理解は以下の通りである。

「社会的と呼ばれるが、実際は形而上学的で、資本主義と呼ばれるこの構造は資本の蓄積である」とラカンが言うように、資本主義は社会的な現象を超越したある必然性に属している。アダム・スミスが「企業家は企て、消費者は消費する」と言ったように、「資本家のディスクール」における「動因」は誰なのであろうか？それは \emptyset である自由経済の自由な主体である。さらに「主人としてのシニフィアン」である S_1 は、「資本家のディスクール」では左下、「真理」の場に置かれているが、これをヴァンシグラは、ここには不可視の権力があると見なす。右上の S_2 が表す「知 savoir」については、これは単に「使用価値」だけでなく、それ自身が市場に置かれ、他の商品と同じように一つの商品となっていると指摘する。

「資本家のディスクール」も他のディスクールと同様、享樂の断念を含んでいるとヴァンシグラはラカンに倣って言うが、その例として挙げているのは、『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』で示されているマックス・ウェーバーの考えとの類似性である。資本主義の精神はアメリカ合衆国に移住したイギリスの清教徒たちに生まれたが、彼らにとって労働とその結果もたらされる富は、自分たちが神によって選ばれたということを、証明する手段とも見なされていた。こうした考えに基づくプロテスタントの倫理を「享樂の断念」のもとに資本主義を建立するもととなっているとヴァンシグラは指摘する。

「どのような交換価値もすでにそれ自身において、享樂することの一つの欠如のシニフィアンであると言わねばなりません。ある商品が手を変えるよう運命付けられているなら、それは正に全体的なやり方では満足させないからであ

り、— 貨幣はすべての商品の、それゆえ欠如の一般的な等価物として定義されます²⁷⁾」と言うヴァンシグラの考えを敷衍してみれば、どのような対象も「交換」することを目的としている限り、それ自体には満足していないこと、いわば欠如を示しているというなのであろう。

この点に関して、ラカンの四つのディスクールが提示された『精神分析の裏側』が活字で明らかにされるはるか前に既に「マルクスの症候という概念」に着目していたピエール・ナヴォー Pierre Naveau は以下のようにより明確に説明している。

交換価値は享樂欠如の一つのシニフィアンと見なされうる。ある交換価値は別の交換価値に対し、一つの享樂欠如 un manque-à-jour を代理表象する。交換の真の対象は享樂欠如である。実際、商品が持ち主を変えるよう運命づけられているとしたなら、交換されるのは別の不満足に対するある不満足である。もし持たずにいられないものを交換したいと望むなら、それはそれに満足していないからである。交換の対象は、交換のパートナーが享樂²⁸⁾できるが、それを望まず、他方のパートナーが享樂できないが、それを望むものである。

4 マルクスの症候概念

ラカンの症候の概念はマルクスに由来していることは、スラヴォイ・ジジェク Slavoj Žižek や前掲のナヴォーの論文が指摘していることである。ラカン自身がそれを明言している箇所がセミナーにある。

症候の概念の起源を捜すこと、その概念はまったくヒポクラテスにではなく、マルクスに捜すべきであり、マルクスは彼が資本主義と何ものかとの間に最初に関係を打ち立てたのです。それは古きよき時代、結局人が望むときにそう呼ぶものですが、それを別な風と呼ぶよう努めれば、中世の時代となりますが、それとの間に打ち立てた関係ということです。そのことに関しては、全ての文学を読んでください。資本主義は幾つかの効果を持ったものとして考察され、そして現実には、なぜ資本主義はそれを持たないのでしょうか！これらの効果は結局のところ、好結果をもたらすものなの

です。というのは、資本主義はプロレタリアの人間を無に煎じ詰めるという長所を持っており、そのおかげで、プロレタリアの人間は、人間の本質を表すのであり、全てを奪われているということは、未来のメシアであるべく責務を負っているのです。これが、マルクスが症候を分析したやりかたです。彼は勿論他のたくさんの症候を与えました。しかしこれと信仰との関係はまったく議論の余地のないものです。

もしわれわれが、人間を、もはやある理想の未来を運んでくる何かではないとするが、しかしその人間をそれぞれの場合に、特殊性やその無意識や人がそれを享楽するやり方で規定するとしたなら、症候はマルクスがそれを置いたのと同じ場所に留まります。しかし症候は別の意味を持ちます。それは社会的な症候ではなくて特別な症候です。おそらくこの特別な症候はいくつかの型をもっており、強迫神経症の症候はヒステリー患者のそれとは違います。まさにこのことこそ、私が以下において皆さんの関心に向けさせようとしていることなのです。(1975年2月18日)²⁹⁾

ここに明言されているように、ラカンは「症候」と言う概念をマルクスが使った意味において使い、しかもそれを踏まえた上で、神経症の「症候」と比較していることが分かる。

ヴァンシグラの前掲論文で驚くべきことの一つは、そのラカンが借りた、マルクスの「症候」と言う概念が『資本論』に書かれているそれではなく、マルクスが1844年に書いた『草稿』に由来するのだと断言していることである。しかし筆者の知っている限りにおいて、ラカンが自らの症候の概念をマルクスのこの草稿から借りているということを明言している箇所は見つかっていない。まず、その1844年の『草稿』から「症候」と言う言葉が出てくる箇所を探してそれがどのように使われているか見てみよう。

くくしたがって金利の低下は一ブルードンはそれを資本の止揚と、また資本の社会化への傾向とみなしたのであるが—むしろ直接的には、働きつつある資本の、浪費的な富にたいする全面的な勝利の一徵候 (un symptôme) であるにすぎない。すなわち、すべての私有財産の産業資本への転化であり—私有財産にまだ人間的な諸性質があるかのようなすべての外観にたいする私有財産の全面的な勝利であり、私有財産の本質—労働—への私有財産所有者の完全な屈服なのである。たしかに産業資本家もまた享

樂する。彼はけっして欲求の不自然な単純さに復歸するわけではないが、しかし彼の享樂は、生産に従属した副次的な事柄、つまり休養であるにすぎず、さらにまた、計算された、したがって経済的でさえある享樂なのである。というのは、彼は自分の享樂を資本の費用に加算するからである。だから彼の享樂にかかる費用は、彼によって浪費されたものが資本の再生産によって利得つきでふたたび補充される程度だけしか許されない。したがって、以前には反対のことがおこなわれていたのに対して、いまや享樂は資本のもとへ、享樂している個人は資本を動かしている個人のもとへと、包摂されるのである。それゆえ利子の低下が資本の止揚の一徴候、つまり完成しつつある疎外の、したがってみづからの止揚へと急ぎつつある疎外の一徴候であるかぎりにおいてである。これが一般に現存するものがその反対のものを検証する唯一の仕方である。— >> (城塚 登・田中吉六訳。下線は引用者、)³⁰⁾

「徴候」と訳されている語に下線を引いたが、この部分のフランス語訳では³¹⁾ un symptôme と訳されている。

マルクスが「症候を発見した」と見なすラカンの見方に対し、どうやって「発見したのか」という自らの疑問に対し、ジジエクは『草稿』ではなく、『資本論』のマルクスの読みに基づき答えている。ジジエクによれば、マルクスは「ある亀裂、ある非対称、ブルジョワ的な『権利と義務』の普遍主義を裏切るようなある『病理学的』不均衡を見つけ出すことによって」³²⁾ 症候を発見したと見なす。さらにジジエクは「『症候』とは、厳密に言えば、それ自身の普遍的基盤を崩してしまうような特定の要素、いわばおのれが属している類を滅亡させてしまう種である」と定義する。その具体例としてジジエクが挙げて説明しているのは、商品の等価交換の原則のもとに成り立つ資本主義社会に、「労働力」という特殊な「商品」が生まれたとき、その労働はある「剰余価値」を生み出すためその「労働力」という新しい商品は「商品の等価交換という普遍原理の内部否定を表象しているような、新しい商品」とも言える。それをジジエクは「商品生産の普遍化は症候を引き起こすのだ」と言い換えている。³³⁾

さらにジジエクは最初に掲げたラカンの、封建制から資本主義への移行にマルクスが症候を発見したという指摘を踏まえて、その移行の時期には、市民社

会の確立により、支配と隷属の関係は抑圧され、その支配と隷属は依然としてあるという真実が症候となって現れるのだと指摘している。³⁴⁾

「剰余享楽」についてはラカン自身は、マルクスの「剰余価値」と同じものだというだけで、どう違うかについては明確に述べていない。ジジエクは次のようにこの二つの概念の関係を説明する。

ジジエクはマルクスの『資本論』で、資本主義の論理的・歴史的限界を表すために用いていると彼が見なす公式「資本の限界は資本そのもの、すなわち資本主義的生産様式である」を資本主義の発展の力をそぐような矛盾・不和、といった内在的な均衡欠如から逃れられず、それゆえ絶えず変化・発展し続けるという現実を表していると理解する。「資本主義はその限界・その無能力さを、その力の源に変えることができるのだ」という見方に基づき、³⁵⁾「剰余享楽」の定義を試みる。ジジエクは正常で基本的な「享楽」に付け加わったものとしての「剰余」ではなく、その「剰余」を差し引いてしまうと「享楽」そのものが消えてしまうようなものとして「剰余享楽」を理解する。

こうしたジジエクの説明は彼の他の著作における記述に多く見られる特徴でもあるが、非常に観念的であり、賛同も反論も困難である。

「剰余享楽」と「剰余価値」は「同じ構造」で「類推」ではない、そして二つとも「資本家のディスクール」という鋏で切り取れるものだとラカン自身が説明しているため、³⁶⁾二つの概念の違いが分からない。まったく同じものとしたならなぜ新たな用語を生み出したのだろうか。ラカンのシニフィアンの定義の仕方に倣えば、「剰余享楽」は「剰余価値」に対し何を代理表象するのかということが問題となる。

これについて考えるために『精神分析の裏側』というセミナーの前年(1968-1969)に行われた『ある大文字の他者から小文字の他者へ』というセミナーでこの二つの概念について論じているところを搜すと、以下のように述べている箇所がある。

剰余享樂はディスクールの効果の下での享樂の断念によって決定されます。その場を対象 a に与えるものはそれです。市場が人間の労働の何らかの対象を商品と定義する限りにおいて、この対象はそれ自身のうちに剰余価値の何かを持っているのです。³⁷⁾ かくして、剰余享樂は対象 a の機能を分離することを可能にするものなのです。

ある主体はあるシニフィアンによって、もう一つの別のシニフィアンに対し代理表象されるものです。このことは、マルクスが解説したもの、すなわち経済的現実においては、交換価値の主体は、使用価値に対し代理表象されるという事実にとっくり似せられていないでしょうか？ 剰余価値と呼ばれるものが生み出され、落ちるのは、その裂け目においてなのです。私たちの次元においては、この喪失しか数えられません。もはや自分自身と同一ではない主体は享樂しません。剰余享樂と呼ばれる何かが失われるのです。(Quelque chose est perdu qui s'appelle le plus-de-jour) それは厳密にはそれ以来思考の全てを決定するものが機能し始めることに関係しています。

症候においても事情は別ではありません。³⁸⁾

下線部の perdu のあとにもしコンマがあれば、「何か³⁷⁾が失われ、そのことが剰余享樂と呼ばれるのです」と訳すことができ、より理論的整合性が成り立つと思われるが、そうになっていない。しかしここに引用した箇所は次のように敷衍される。

主体はあるシニフィアンによって別のシニフィアンに対し代理表象される以上、主体はそれだけで主体として存在することはできない。またその主体は、「対象 a」という「欲望の原因対象」と幻想というマテーム（数学素）(§◇ a) のうちに一体化して、言い換えれば消え去っている。それと同じく、資本主義の経済活動においても、主体は「商品」の流通の過程において「商品」の「使用価値」に対する「交換価値」の主体という形でしか主体は現れてこないということなのだろう。これは、前にあげたナヴォーの引用を考えてみれば分かると思われる。ナヴォーは「交換価値」に対し別の「交換価値」が主体の商品に対する不満足という「享樂欠如」を表していると主張しているが、一方を「使用価値」と言い換えても成り立つと思われる。そしてナヴォーの言う「享

「楽欠如」というのはラカンの「剰余享楽」という概念にかなり重なるのではないだろうか。

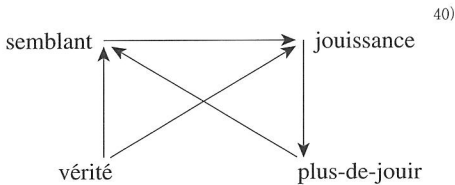
さらにラカンは「剰余享楽」と「症候」との関係を次のように説明している。

めいめいが自分の享楽との関係において苦しむやり方、それはめいめいが、剰余享楽の機能によってのみその関係に組み込まれる限りにおいてですが、それが症候です。— その症候がここ、もはや平均的で、抽象的な社会的真実しかないということから現れる限りにおいてですが。³⁹⁾

5 ディスクールの四つの場の名前の変更と「資本家のディスクール」

「剰余享楽」がどのような理由で「剰余価値」と相同的なものであるか、それらの違いはあるのかという点は明確ではないが、「資本家のディスクール」が初めて図式として示された1972年という同じ年に行われた『精神分析家の知 *Le savoir du psychanalyste*』というセミナーにおいて、ラカンは四つのディスクールの種類は変えず、その四つの場の呼び名を以下のように変えて提示している。

8



左下の「真理」と右下の「剰余享楽」の場の呼び名は『精神分析の裏側』のセミナーで示されていた一つのもと同じであるが、左上の「主人としてのシニフィアン」が置かれる「動因 agent」の場は「見せかけ semblant」となり、右上の「知」や「他者」や「労働」と呼ばれた場は「享楽 jouissance」と呼ばれている。この「享楽」は『精神分析の裏側』では、場を示す名前ではなく、

場に置かれた項の「機能」を表す名であった。

しかし、「主人としてのシニフィアン」は「真理」を下に隠していると考え、ラカンの言うように「享楽」を断念することが「剰余享楽」を生み出すとしたなら、その「享楽」から真下に矢印が下りている方が納得のいく命名の仕方かもしれないとも思えてくるのである。

このディスクールの場の名前の変更がなされたのと同じ年に、先に紹介したミラノの講演でラカン自身は「資本家のディスクール」について次のように述べている。

(…) なぜなら、皆さんお分かりのように、資本家のディスクールはここにあります。…単に S_1 と $\$$ 、これは主体なのですが、これらの間のまったく小さな転倒があります。…それがルーレットにおけるように動くにはこれで充分です。これ以上うまくは動かないでしょう。しかしまさにそれは少し動くのが速過ぎます。それはそれは消費され *Ça se consomme*, 消費されることではがって使い尽くされる *ça se consume* のです。⁴¹⁾

さて、この説明を図4で示された「資本家のディスクール」に当てはめて考えてみよう。まずこの「資本家のディスクール」においては上の矢印は消えており、回路は横にした8の字形に循環しており、「不可能」も「不能」も消えていることである。「見せかけ」の位置におかれた「主体」は「商品」に隠された「剰余享楽」 a に動かされ、「主人としてのシニフィアン」 S_1 に働きかける。そのシニフィアンは「享楽」という場で作用する「知」という S_2 に働きかけるが、それが「剰余享楽」を生み出す。資本主義消費社会における S_1 や S_2 が具体的には何をさすかは分からないが、一応そのように考えられる。

その資本主義社会において生み出される対象（「商品」）をラカンは「ラトウーズ *Lathouses*」と呼んでいる。⁴²⁾ ヴァンシグラは、この語は「吸盤 *ventouses*」と韻を踏んでおり、ギリシャ語で「隠す」を意味する *lanthanein* の過去分詞に由来していると指摘し、そのラトウーズはラカンが「まがいものの剰

余享樂」と呼ぶものであり、「確かに、ラトウーズは拡張された生産の諸々の対象であり、それらは隠すと同じくらい示すのである⁴³⁾」と説明する。

おわりに

さて、先に出版されたセミナー第17巻『精神分析の裏側』で提示された四つのディスクールにより、ラカン理論は一挙にその射程を社会全体に広げた。それまでに出版されていた範囲では、あくまで個人における欲望のあり方を巡って理論が展開されていたように思えたのだが、性的欲望からは、直接的には離れた「商品」への欲望によって成り立つ流通により機能する資本主義社会を「症候」や「剰余享樂」という概念のもとに、解明しようとした新たなラカンの歩みを検討した。その前の年のセミナーである『大文字の他者から小文字の他者へ』においては、「欲望のグラフ」についての説明も組み込まれていることから分かるように、個人的欲望が社会的な欲望へと変化していくさまが分析されている。

四面体に着想を得た幾何学的で形式的なディスクールは、時に現実から遊離した遊戯的な図式に陥りそうな危うさを残しながらも、資本主義社会のメカニズムをどうにか捉えることに成功しているように思える。それは、ラカンがあくまで現実を見据え、「商品」という形で動いていく、マルクスによって発見された「剰余価値」の本質を見抜くことができたからだと思われる。

註

- 1) Jacques Lacan, *Le Séminaire livre XVII, L'envers de la psychanalyse*, Seuil, 1991.
- 2) Jacques Lacan, Conférence à l'université de Milan, le 12 mai 1972, *Du discours psychanalytique*, <http://perso.wanadoo.fr/espace.freud/topos/psych/psysem/italie.htm> にて公開されている。
- 3) *Ibid.*
- 4) Jacques Lacan, *D'un discours qui ne serait pas du semblant*. 未刊なので本稿では l'Association Lacanienne Internationale の会員用の版, 2001年版を使用。pp.

- 48-49.
- 5) *Ibid.*, p. 49.
 - 6) 番場 寛「ラカンのドラの症例解釈における差異と反復, 日本ラカン協会編, 『I.R.S.—ジャック・ラカン研究—』第4号, 2005年。
 - 7) Jacques Lacan, *Radiophonie in Autres écrits*, Seuil, 2001.
 - 8) ここでは, 印刷の都合で Marc Darmon, *Essais sur la topologie lacanienne, Nouvelle édition, revue et augmentée*, Éditions de l'Association Lacanienne Internationale, 2004, p. 346 の図を使用する。
 - 9) Marc Darmon, *Essais sur la topologie lacanienne, Nouvelle édition, revue et augmentée*, Éditions de l'Association Lacanienne Internationale, 2004, p. 346
 - 10) *Ibid.*, pp. 347-348.
 - 11) *Ibid.*, p. 347.
 - 12) *Ibid.*
 - 13) Jacques Lacan, *Le Séminaire livreXVII, L'envers de la psychanalyse*, Seuil, 1991. pp. 150-151.
 - 14) Mark Bracher, On the Psychological and Social Functions of Language : Lacan's Theory of the Four Discourses, in *Lacanian Theory of Discourse*, New York university press, 1994. p. 112.
 - 15) Dany Nobus, *Jacques Lacan and the Freudian Practice of Psychoanalysis*, Routledge, 2000. p. 94.
 - 16) Jacques Lacan, *Le Séminaire livreXVII, L'envers de la psychanalyse*, Seuil, 1991, p. 202.
 - 17) *Ibid.*, p. 203.
 - 18) *Ibid.*
 - 19) Rose-Paule Vinciguerra, Marx *pas sans* Lacan, in *LETTERiNA* No. 34, 2003. なお, これは最初, ラカン派の一つの組織「フロイトの大儀派」の一つの研究会の主催で, 同名のタイトルのもとに講演として発表された。
 - 20) *Ibid.*, pp. 58-59.
 - 21) *Ibid.* p. 59.
 - 22) *Ibid.* pp. 60-61.
 - 23) Jacques Lacan, *Le Séminaire livreXVI, D'un Autre à l'autre*, Seuil, 2006. p. 37.
 - 24) カール・マルクス, 『資本論』第3巻1, 大月書店1981年版, 33頁。
 - 25) 同書, 34頁。
 - 26) Rose-Paule Vinciguerra, *op.cit.*, pp. 61-63.
 - 27) *Ibid.*, p. 63.

- 28) Pierre Naveau, Marx et le symptôme, in *Perspectives psychanalytique sur la politique*, ANARYTICA Volume 33, Navarin éditeur, 1983. p. 25.
- 29) Jacques Lacan, *R.S.I.* 未刊なので本稿では l'Association Lacanienne Internationale の会員用の版, 2002 年版を使用。pp. 98-99.
- 30) マルクス, 『経済学・哲学草稿』, 岩波文庫, 2002 年版, 165-167 頁
- 31) ネットで公開されている。
http://classiques.uqac.ca/classiques/Marx_karl/manuscripts_1844/manuscripts_1844.html
- 32) Slavoj Žižek, *The Sublime Object of Ideology*, Verso, 1989. 本稿では, スラヴォイ・ジジェク著, 鈴木晶訳, 『イデオロギーの崇高な対象』, 河出書房新社, 2002 年版を使用。36 頁。
- 33) 同書, 38 頁。
- 34) 同書, 43 頁。
- 35) 同書, 84 頁。
- 36) Jacques Lacan, *Le Séminaire livreXVI, D'un Autre à l'autre*, Seuil, 26. p. 45.
- 37) *Ibid.*, p. 18.
- 38) *Ibid.*, p. 21.
- 39) *Ibid.*, p. 41.
- 40) Jacques Lacan, *Le savoir du psychanalyste*. 未刊なので本稿では l'Association Lacanienne Internationale の会員用の版, 2001 年版を使用。p. 58.
- 41) Jacques Lacan, *op.cit.*
- 42) Jacques Lacan, *Le Séminaire livreXVII, L'envers de la psychanalyse*, Seuil, 1991, p. 188. なお, 789 *NEOLOGISMES DE Jacques Lacan*, EPEL, 2002, p. 52 には *Lathouses* というギリシア語は「字義通りには忘れられたものごと choses oubliées」を意味するとある。
- 43) Rose-Paule Vinciguerra, *op.cit.*, p. 64.

(本学助教授)
(2006年4月6日受領)